

「先端量子ビーム科学研究センター」
発足と若手研究者育成への思い

大西 宏明

Ohnishi Hiroaki

(東北大学先端量子ビーム科学研究センター)



ご存知の方も多いかと思いますが、2024年4月、東北大学において長年皆様に親しまれてきた「サイクロトロン・ラジオアイソトープセンター」と「電子光理学研究センター」が統合され、新たに「先端量子ビーム科学研究センター (Research Center for Accelerator and Radioisotope Science, RARiS)」が発足いたしました。当センターのミッションは、加速器が生み出す量子ビーム(電子線, γ 線, 中性子線, イオンビーム)を駆使し、基礎科学及び応用科学を推進することです。それに加え、量子ビームを活用して生成される放射性同位体を基盤とした研究(核薬学, 核医学, 医工学等)にも取り組んでいます。統合を経て、放射線を用いた研究が多岐にわたる学術分野で応用されていることを改めて実感しています。しかしながら、当センターの活動は、皆様のご支援とご協力なくして成り立ちません。引き続きご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

当センターが果たすべきもう1つの重要な役割は、次世代を担う若手人材の育成があります。特に博士課程の人材を増やすことは喫緊の課題として議論されていますが、期待どおりに集まっていないのが現状です。国や大学による経済的支援は、私が学生であった頃に比べて格段に多様化し、充実してきていると感じています。それにもかかわらず、なぜ博士課程に進学する人材が増えていないのでしょうか。その原因を探り、もう一度原点に立ち返って考え直すべき時期に来ていると感じています。

そこでまず「学問」とは何かについて考えてみました。私は、それを「学び」ながら「問う」ことで理解を深める営みだと考えています。博士課程の初期に、国際共同実験で中国籍の共同研究者と準備を進めていた際、彼から「学問を漢字で書くと学び問うことである。なぜ君は問わないのか」と厳しく指摘されました。加えて「日本の学生は勉強はするが、問うことが足りない。議論からしか新しいものは生まれない」と言われ、その言葉に衝撃を受けました。それ以降、私は積極的に議論を重ねることを心がけました。その結果、議論の中で興味が湧き、新たな発見が生まれることを実感したことを思い起こします。自明ではありますが、やはり議論することこそ学問の基本なのではないのでしょうか。

また、最近、衣笠祥雄氏のインタビューの中で、「スポーツは、誰に向けてしていると思いますか?」という問いに対する「子どもたちのため。スポーツ選手は常に子どもの手本でなければならない」という返答を耳にしました。この言葉を聞いたとき、これはスポーツに限った話ではなく、学問にも通じるものがあると感じました。そして、自分自身が子どもたちにとって手本となる研究者であるかどうかを問い直す機会が増えました。私たち研究者が夢を持ち、夢を語り、研究を楽しむ姿こそが、若い世代を惹きつける最大の要素であるということではないのでしょうか。

したがって、次世代の研究者育成のために必要なことはなんであるのか?それは、私たち自身が研究を楽しむ姿を見せつつ、積極的に様々なことについて自由に議論を続けることなのだろうと感じています。しかしながら昨今の業務多忙の中、学生達と十分に議論する時間を取れていない現状を反省すると共に、この状況を改善し、より良い環境を整えるために何をすべきかを日々自問しております。センターの活動がその一助となれるよう努力していく所存です。